第七講　心情把握問題解法　40分

次の文章は、山田詠美（えいみ）『海の庭』の一部である。主人公の日向子（ひなこ）は高校二年生。家族は母親の実家で暮らしていたが、高校入学直後に両親が離婚し父が出て行った。父の荷物の搬出にやってきた引っ越し業者（作並（さくなみ））は母の幼なじみで、それ以来、彼はたびたび実家を訪れるようになる。二人は子供の頃、実家の庭を遊び場にしており、その時の会話を二人が再現する様子を日向子は何度か目撃する。日向子も彼と親しく話すようになり、母にならって作並くんと呼ぶが、母と彼の関係に違和感がぬぐえない。夏休み、日向子・作並・日向子の友人の三人で海に行く。これを読んで、後の問いに答えよ。

海に着くと、友達は知り合いの家に預けてあったサーフボードを抱えて早速出掛けてしまった。帰りは、都内に出る用事のあるそこの家の人に送ってもらうと言う。

「日向ちゃんはいいの？　やんなくて」

「今日はお休み。作並くんひとり残すと可哀相（かわいそう）だからね」

私たちは波の立たない場所を捜して泳いだり、波打ち際で遊んだりした。疲れると砂の上に横たわり休んだ。

「ほんとは、このあたり遊泳禁止なんだよ」

「どうりで。人はいっぱいいるのに海の家とか何もないもんなあ」

「作並くん、海好き?」

「好きだけど、ずっと来てなかったなあ。海の記憶っていうと、砂浜に転がってた黄色いサンオイルの容器……だから、たぶん日向ちゃんぐらいの年だ」

「黄色いサンオイル?　何それ、どこの?」

「資生堂だと思うけど。コパトーンとか出る前の話だよ」

「コパトーンのない時代なんてあったの?　有り得ない。作並くん、ずい分昔から生きてんだね」

①作並くんは驚いたように私を見詰めた。意外なことを言われた、と言いたげだった。

「……私、何か変なこと言った?」

「いや。そうか、そんなに年離れてたか。そうだよなあ」

時折吹く強い風に飛ばされた砂粒が陽ざしの中できらめいた。作並くんは遠くで波乗りをする人たちを無言でながめている。海に目を向ける人に

は二つの種類があるのを、私は知っている。そこに現在を見る人と過去を見る人だ。彼は、昔の海水浴場でも思い出しているのだろうか。だとしたら、そこから連れ戻したい。私が見ている海を見て欲しい。せっかくここに一緒にいるのだから。私たち、今、同じ暑さの中にいる。

　幼ない頃、両親は、毎年私を海辺に連れて行ってくれた。父の会社の保養施設に宿泊したのだ。私たちは、岩場にみっしりと付いたむらさき貝に鳥肌を立てたり、うみうしをつかんで気味悪がったりした。海には、ずい分と不思議な生き物がいるものだ、と感心した。あの海にいた私に過去も未来もなかった。その時に見ているもの、触れているもの、感じているものだけが、すべてだった。瞬間瞬間に、それらは私をとりこにしていた。そこには、父と母も含まれていた。やがて、私は、家族そろった海辺の夏を失ったが、そこに思いを残すことはなかった。過ぎ去った夏は、幼ない頃の私だけのものだ。今の私のものじゃない。

　今の私の海は、ここにある。先週見た海はもう私のものではないし、来週見るかもしれない海も私のものじゃない。今、ここ。むらさき貝もうみうしも、あの時見た他の生物もいない。父と母もいない。その代わりに、浜辺に打ち上げられた海草やボードを抱えて戻って来る男の人や作並くんがいる。この光景が大好きだと思う。けれど、将来、懐しむことはあっても、

この日に戻りたいとは思わないような気がする。思い馳(は)せる過去は、既に何かを失っているからだ。仲の良い海辺の家族が、もういないように。

「作並くんは、昔のママが好きなんでしょ？　今のママには興味ないんでしょ？」

「そんなことないよ。おれ、今の吉田が好きだよ」

「②嘘！　二人共、お互いのちっちゃい頃しか見てない」

「そう見えるの？」

「見える!!」

作並くんは溜息(ためいき)をついた。

「日向ちゃん、解(わか)ってないな。おれが見てるのは小さかった頃の吉田じゃないよ。年取った今の彼女だよ。昔よりずっといい。彼女なりに疲れることとして来たんだろう。もうほっぺたに子供みたいな可愛(かわい)い脂肪を付けてないし皺(しわ)もある。それなのに、おれの戻りたい場所をちゃんと隠してる。おれは、もう一度そこに辿(たど)り着きたいの」

「辿り着いたらどうするの？」

「さあ」作並くんは、おどけたように肩をすくめた。

「もう一度、哲ちゃんて呼んでもらうかな」

「それって、やっぱ、初恋やり直すってことじゃん」

頬（ほお）をつねられた。その力が強過ぎて、私は声を上げた。あんまりしつこいので怒らせてしまったかとうかがうと、作並くんは私の頬を撫（な）でて笑った。

「大人が初恋やり直すって、いやらしくて最高だろ?」

その言葉に、私の方が照れた。今まで首を傾（かし）げて傍観していた二人の様子が、鮮明に色を変えて脳裏に浮かび上がって来た。そうだったのか、と腑（ふ）に落ちた。二人は、子供の純粋さを取り戻そうとしていたのではなく、大人の淫靡（いんび）さを作り上げようとしていたのか。③思い出って、そんなことに有効に使えるものなの? いやらしい、と思った。そして、唐突に、つき合ったことのある男の子たちを思い出した。裸になって、あの子たちとしたこと、あの子たちの体のパーツ、その動き。作並くんと母に比べたら、いやらしさなんて欠片（かけら）もない。そして、それは、なんと退屈に終わりを迎えたことだろう。

「ママとキスしたことある?」

答えようとしないので何度もせがんだ。

「答えないと死ぬ」

「よせよ」

「海に飛び込んで溺れて死ぬ」

「日向ちゃん、泳ぎ上手だから無理だろ」

「じゃ、あのサーファーに頼んで、作並くんのこと海に連れてって捨てて来てもらう」

私は立ち上がり、作並くんの腕をつかんで引っ張って行こうとした。けれども、強い力で反対に引っ張られて彼に覆い被（かぶ）さるような形で転んだ。

「一度だけあるよ」

「どこで?」

「あの庭の離れで。それからもう、あの庭には行ってない。そして、哲ちゃん小夜ちゃんとも呼び合わなくなった。習字なんて嫌だったけど、あの庭は好きだった。でも、中学に入る頃から、おれ、あの庭そのものじゃなくて、離れに行くことが目標になってた。今思うと可愛いもんだけど、あの頃は、そんな自分が後ろめたくてたまんなかったよ」

私は、木々に囲まれて夏でもひんやりとした空気の沈む書道教室を思い浮かべた。二人は、あそこに辿り着きたいのだ。そして、④そこから、もう一度始める。初恋に限りなく似た、けれども、まったく異なるつながりを。

「私、どういう顔して、作並くんとママを見たらいいのか解んなくなっちゃったよ」

「今まで通りでいいじゃないか。こんなことどうってことないよ。だって、

三十年間どうってことなかったんだから」

　作並くんは私の体に付いた砂を払った。

「心配するなよ。おれ、吉田とどうにかなろうなんて思ってないから。もう離れに人がいなくなるのを見計らってた頃のがきじゃない」

⑤<u>がきだよ。私は心の中で呟（つぶや）いた。</u>そうしたら哲ちゃんて呼びたくなった。作並くんが、私を日向ちゃんて呼ぶなら、私も、哲ちゃんて呼んでも良い筈（はず）だ。

　日が傾く前に、私たちは車を停めてある空地に戻った。途中、通り過ぎようとしたボルボのワゴンの脇で、何人かの男たちが運んで来たポリタンクの真水で体を洗っていた。その中のひとりが、私を呼んだ。時々、教えてもらっているサーファーだ。私は、彼の許（もと）に小走りで近付いて挨拶した。

「日向子、来てるんなら声かけてくれたって良かったじゃん」

「気が付かなかったんだよ」

　彼は、少し離れた所にいる作並くんを見て声を潜めようともせず、言った。

「誰だよ、あのおやじ。さっき、二人でべたべたしてたけど、最低。マジで日向子に似合わねえよ、だせー」

「見てたんなら、そっちこそ声かけりゃいいじゃん」

「おれ、おやじ、真面目に、きれーだもん」

「あんたの方が、余程、おやじだよ、ターコ」

「あ?」

呆気に取られる彼を残して、私は、作並くんに駆け寄った。今の会話を聞いて気を悪くしていなければ良いのだが、と思って見詰めると、彼は、無言のまま私を車に促した。

「作並くん、ごめん」

「なんで日向ちゃんが謝るの。おれが、おやじなのは事実でしょ」

作並くんは、そう言って、車の中からTシャツを取り出した。その背中が急な日灼けで真っ赤になっている。彼の肌は、作業着から出ている部分しか黒くない。さっきの男が言った通りだ。ほんと、「だせー」。そう思ったら、涙が溢れて来た。

「おい、どうした、どうした」

作並くんは、慌てて私に近寄って肩を抱いて顔を覗き込んだ。目が合った。真底、困り果てたように目尻がたれている。涙が止まらない。だせーおやじ。情けない。でも、人を情けないと思うのと、いとおしいと思うことってなんて似ているんだろう。

東京方面に向かう車の中でも、私は、ずっと泣いていた。作並くんは、

時々、私の様子をうかがっているようだったが何も言わなかった。家に着いて、私を降ろす段になって、ようやく口を開いた。

「すっきりしたか」

「まあね」途端に気恥しくなり、私は、不貞腐（ふてくさ）れたように口をとがらせた。

「涙を溜（た）め込むと体に悪いらしいぞ。泣きたくなったら、いつでもおれに言えよ。泣かしてやるから」

「どうやって？」

「海に連れてって、あの小僧たちに、おやじよばわりされてやる」

「ばーか、そんなんじゃ泣けねーよ、真実だもん」

笑い声を背後に聞きながら、私は、乱暴に車のドアを閉めた。クラクションを二度鳴らして、作並くんは去って行った。私は、振り返って、車が小さくなるのを見詰めながらひとりごちた。⑥慰めてやる。今度、あいつらが哲ちゃんを苛（いじ）めたりしたら、絶対に私が慰めてやるから。

問一　傍線部①に「作並くんは驚いたように私を見詰めた。意外なことを言われた、と言いたげだった」とある。作並くんは何に驚いたのか。説明せよ。

問二　傍線部②に「嘘！　二人共、お互いのちっちゃい頃しか見てない」とある。日向子がこのように確信していた理由を本文中の言葉を使って説明せよ。

問三　傍線部③に「思い出って、そんなことに有効に使えるものなの？」とある。思い出のあり方に対して日向子はなぜそのように感じたのか。その理由を説明せよ。

問四　傍線部④に「そこから、もう一度始める。初恋に限りなく似た、けれども、まったく異なるつながりを」とある。これとほぼ同じ内容を述べている一文をこれより前から見つけ、冒頭の五字を抜き出せ（句読点を含む）。

問五　傍線部⑤に「がきだよ。私は心の中で呟いた」とある。日向子がこのように感じた理由を説明せよ。

問六　傍線部⑥に「慰めてやる。今度、あいつらが哲ちゃんを苛めたりしたら、絶対に私が慰めてやるから」とある。ここには作並に対する日向子の気持ちの変化が表れている。日向子の気持ちはどのように変化したのか。「涙」「いとおしい」「おやじ」の三語を使って説明せよ。

問一

問二

問三

問四

問五

問六

第七講　心情把握問題解法　解答

問一

作並の方がかなり年上であることを日向子に指摘され、気にかけていなかった年齢差を自覚させられたこと。

問二

作並が現在の自分の年齢を自覚していなかったことから、作並は海に目を向ける時に現在を見る人ではなく過去を見る人だと思ったから。

問三

過去の思い出は現在と隔絶したものだと日向子は考えていたため、過去の思い出を再現することで現在の関係を作り出す作並の考えに対して意外に思ったから。

問四

二人は、子

問五

作並は今隣にいる日向子ではなく、子供の頃に好きだった母に好意を抱いているから。

問六

初めは母に対する対抗心から作並の気を惹きたいと思っていたが、知り合いに作並をおやじだと指摘されることで、ださくて情けないと思い涙が溢れた。と同時に、情けないと思うのと、いとおしいと思うことが似ていることに気がつき、作並に対していとおしさを感じるようになった。